英知通信

昭和51年3月30日　英知大学　No.15

正義の不滅なるを確信して

学長　岸　英司

今日、ここにご来賓各位のご臨席を仰ぎ、教職員、在学生と共に昭和五十年度、英知大学卒業証書授与式を挙行致しますことは、本日ご卒業の皆さんをはじめ、御父兄の皆様、教職員、在学生すべての者の喜びであります。

私はここに本大学を代表し、卒業生の皆さんとご父兄の皆様に対しまして心よりおめでとうと申し上げます。

本日アメリカ、ステファン首席領事及びベルギー、デリュー総領事のご出席を頂きましたことは、本学の国際性を示すものであり、ご両名に対しまして心より御礼申し上げます

はるばる岡山よりノートルダム清心女子大学シスター・セント・ジョン渡辺和子学長のお越しを頂きましたことは、カトリック大学間の友情と協力を表わすものであり、ここに深甚なる謝意を表わすものであります

また本大学後援会山口満雄会長及び林副会長ご両名のご出席を得ましたことは、後援会の本学へのご熱意の表われであり、同じく心より感謝いたすものであります。

さて本日卒業される皆さんの四年間に渡る大学生活は静かなものであったとはいえ、世界及び社会の激動期であったと申せましょう。

経済的には三年前の石油ショック以来世界経済はインフレの中の不況という最も困難な時代を迎えました。民族的利己主義は世界の経済を狂わせており、また全体的イデオロギーは人間の自由をおびやかしております。

戦後の日本が国家の目標として掲げてきた「経済的繁栄」はひとりの人間の人生と国家の将来の目標となることができないということが益々明らかになってまいりました。

私は昨年の卒業生の皆さんに対してアメリカの大統領及び日本の首相の交替にみられた様に不義不正なる力の敗北を指摘し、道義的秩序への信仰、正しく生きることの必要なことを訴えたのでありますが、この必要性は今日一層明確となりました。

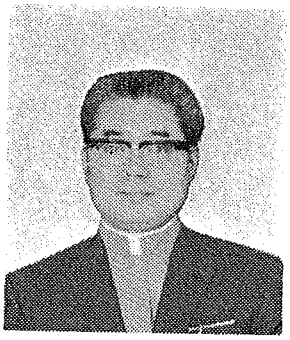
すなわち最近のロッキード問題は単に日本の政界財界の問題たるのみならず、日本という国家全体のおそるべき病いであることを明らかに示しております。

本大学はサピエンチア英知を創立の精神とし、英知を理想といたします。従って旧約聖書におけるリベル、サピエンチエ「知恵の書」を格別に尊敬いたすのであります。

「知恵の書」第一章一節には「地を支配する者たちよ、正義を愛せよ」と教えております。

第七節以下には「実に、主の霊は、宇宙を満たし、すべてを抱きよせ、人間の言葉を聞いている。だから、不敬を言う人は、身を隠しきれず、正義の加える罰から逃げ切れない。悪人の計画は、調べられ、この言葉の響きは主に届き、この罪悪は罰せられる」（七―九）と十五節には、「実に、正義は永遠であり不死である」とあります。

今日、私達は真実に、悪の滅びることと、正義の不滅なることを確信して、正義の実現のために努力しなければならないのであります。



私は昨年と同じく、本日卒業される皆さんにも申し上げたいのです。

皆さんのこれからの人生の本当の幸せ、それは悪に組みすることなく常に正しさに生きることであるということであります。

私達日本人は今、こぞってこのことに目ざめる必要がありましょう。

心のめざめこれこそ私達の行動の原動力であります。

さて英知大学は本年ようやく創立十四年を迎え、いわば青年期に入ります。今まで卒業された方達の中には本学が未だ社会で充分に知られず、ために苦労の多いことを訴える人もあります。

しかしこれまでに卒業された皆さんは本大学に在学中に得た何物かをもって社会の中で励んでおられるのです。

皆さんが四年間の大学生活において学ばれた所のものは知識としては極く僅かなものであって、これは今後とも皆さんの努力の継続を要請するものです。

しかしながら皆さんがこの大学で学ばれた間に、知らず知らずのうちに身につけられた本大学の学風、私はいつもこれを誇りに思っていますが、皆さんは他の大学には無き何物かを身につけられたのです。

このことは皆さんのもっている人間的なやさしさと素直さを指摘するだけで充分でありましょう。

人生は長い様で短かいものであります。従って私達は一日一日を大切にして生きてゆかなくてはなりません。どうか皆さんは正しく生きることこそ、人間としての真の幸福であることを悟って頂きたいのです。

しかし正しく生きるために人間は弱い者なのです。私達はどうしても偉大なる御者、神の助けを必要としています。宗教的次元はこの認識から始まるのです。英知―サピエンチアとはまさにこの弱き人間に与えられるところの神の力なる神の知恵に他なりません。

皆さんの上に、英知の賜が豊かに下ります様に神に祈っております。

本日ご卒業される皆さん。終わりに私は皆さんの今日の人生の輝かしい門出にあたって、皆さんの御健康と御多幸を願って、以上簡単ではありますが、式辞と致します。

（昭和五十一年三月二十三日）

自由を守る責任を強調

―アメリカ主席領事のあいさつ―

昭和五十年度卒業式に際して来賓として招かれたアメリカ総領事館の主席領事・経済商務部長ラルフ・W・ステファン氏は、美しい日本語で親しみやすいユーモアを混じえながらあいさつした。

ステファン氏は卒業生ひとりひとりの手に自由という偉大な特権を守る義務が委ねられていることを指摘し、つぎのように述べた。

「あなたたちは静かに物を考える大学生活に別れを告げ、そしてあなたがた自身や家族の生活費を稼ぐために時間的にもいろいろな要求を受ける面でもかけずりまわる生活に入ろうとしているんですよ。

でもね、そういうことに慣れるにつれてもあなたたちがこの自由社会の一員として楽しんでいるこの自由、将来共にこの自由を満喫するには時間がかかるが皆さんの努力にかかっているということを念頭においてもらいたいんですよ。」

アンリ・モラ先生帰天

本学フランス文学科教授アンリ・モラ先生は、かねてより神戸海星病院に入院療養中のところ、健康状態がすぐれず、昨年十二月二十九日ついに永遠の眠りについた。享年六十四歳。

モラ先生は一九一一年フランスのセンパウルレダックス市に生まれ、パリのミッションエトランゼール大神学校に学び昭和十一年十月カトリック宣教師として来日、昭和二十三年十一月に帰仏、ソルボンヌ大学にて中世史を研究。昭和三十一年に至るまでパリの母校で教会史の教授を勤めた。昭和三十二年三月再び来日。一年間駐日ローマ法王庁公使館の書記を勤めたのちカトリック大阪教区において宣教活動にはげんでいた。

モラ教授は昭和四十三年四月本学フランス文学科の設立と同時に専任教授のひとりとして迎えられフランス語およびフランス文学を教えることとなった。

モラ教授の葬儀は十二月三十日午後二時より神戸中山手カトリック教会において営まれ、多数の司祭、教職員、信徒らがこれに参列した。パリー外国宣教会管区長エミリアン・ミルサン神父が追悼の言葉を述べた。そこにはまさにモラ教授の遺徳が総括的に表わされている。

モラ神父はデリケートな感受性の持主であり、絶えず人を許すべきであると考え、よく努力した。神父は許すことこそ神のみ旨に最もかなうものであると確信し、自分が人を計る秤で自分もまた人から計られるであろうという聖書の言葉通り、愛徳の精神に生きようと務めていた。日本をこよなく愛していた神父は、帰仏中も一日も早く第二の故郷日本へ帰りたいと熱望していた。

神父はいつでも訪問客に対してキリストを迎える心で暖かく迎えいれていた。神父の晩年はプロテスタントの兄弟たちとの和解を願ってエキュメニズム運動のために捧げられた。神父はよく死を準備し、それを静かに落ちついた心で待っていたのである。

モラ先生が帰天された今、神のいつくしみによって先生が安らかに憩われんことを祈るのみである。

故モラ先生をしのんで

長谷川一美（フランス文学科卒業生）

そろそろ各地で梅便りがきかれる頃になりました。梅の香にほんのりすれば、やがてもっと明るい日射しをうけて新学期を迎えるようになるでしょう。この季節には外の陽気が心の中にまで及んでくる気配をはっきり感じたものです。三回生になってそれまでの一般教養課程を終え、専門科目という新しい欄に注意を払いながら登録したものでした。

その専門科目の中に特別講義としてモラ先生の授業がありました。教材はカミュの『異邦人』でした。最初の授業内容はよく印象に残っています。日本語で『異邦人』と訳されているけれども、この異邦人とはどういう意味で、各人はこの語から受けるイメージを描いてみなさい、というものでした。語感からくる私の第一のイメージは、聖書の中で使われている異邦人でした。が、受講を重ねるにつれて L'etranger に含まれているほんとうの意味は何かと問うようになりました。先生の講義は大変丁寧でした。カミュがそこで使ったことば一つ一つを説明してくださいました。一つの問題が提起されると、先生と学生の意見交換が根気よくなされたものです。毎回カミュに大いに興味と関心をもって楽しんで受講していました。その夏、私はフランスへ行く機会をもち、そこで同年代の若者とことばの貧弱さを嘆きながらも彼らが抱いているカミュへの意見をきこうとしました。九月になって私が彼らと感じたカミュを先生の研究室まで訪ねてきいていただいたこともあります。

けれども秋の色が濃くなってきた頃、ご病気のため休講となり、病気のご回復を祈りながら先生のクラスをまっていたのですが、その後は別の先生にバトン・タッチということになりました。次の年のあるクラスでカミュが教材となったときも、最初にカミュを私に教えてくださったモラ先生の授業はいつも参考になりました。授業を終えて食堂で会う私たちクラスの者に親しげに話してくださった先生をよく覚えています。

モラ先生の安らかな眠りと天国でのご冥福をお祈りいたします。

総務部長　小野龍之助氏帰天

昭和四十六年四月より本学総務部に於いて部長として勤めていた小野龍之助氏はかねより入院療養中であったところ、薬石効なく、去る二月二十三日午前九時三十五分動脈硬化による心筋梗塞症で帰天。享年七十歳。

小野氏は昭和九年より二十九年に至るまで旧京都帝大に事務職員として奉職、その後も京都学芸大学、大阪大学、東北大学附属病院、橘女子大学などの事務管理職を歴任してきた文字通り事務職のベテランである。

葬儀は二月二十五日午後二時より、京都市左京区吉田近衛町の自宅で仏式にてしめやかに執行され、教職・事務員らが多数参列し、故人のご死去を悼んだ。

小野氏は本学をこよなく愛し、事務の要職にあって本学の発展のために寄与できることを無上のよろこびとしていた。昭和四十八年より氏の健康状態は思わしくなく、一時休職のやむなきに至ったが、それでも大学のことをずいぶん真剣に心に留めていた。

つつしんで故人のご冥福を祈りたい

英知大学・短大卒業生

―約一二〇〇人を数える

英知大学・短大の卒業生は、今春卒業した大学十期生で、一二二二人になった。内訳は短大（宗教科）一一八名、大学一一〇四名（神学部七文学部一〇九七）となっている。

昭和三十七年に短大宗教科が創設され、ついで翌三十八年に神学部神学科（現文学部神学科）の創設をみた。

大学としては今春の新入生で十四期生を迎える。一度に千人近い卒業生を送る学校と違って、少人数制でかつ歴史の浅い、いわゆる「若い」学校であるだけに、ひとりひとりが重要な位置を占めている。

ともあれ、卒業十期生を送り出し卒業生総数千人を越したことは、すでに大学としての創設時代を終え、成長期に到達したことになる。

誤訳談議

湯次了豊

今はむかし、終戦直後のこと進駐軍が大津市で多大の農地を接収しておきながら遊ばせていたことがある。当時は猫のひたいほどの土地にも、芋や豆を作った食糧難の時代であったから、附近の住民は黙視するに忍びない。「御入用の節には即刻お返えしするから、しばらくの間、せめてその一部のC地区だけでも貸してほしい」とおそるおそるお伺いをたてたものだ。やがて進駐軍当局から〝The area C can, on no condition, be cultivated by the inhabitants.〟という返事がきて、住民は「無条件で」貸してもらえると喜んだのも束の間、実は英和辞典にものっている通り「どんな条件でも駄目」という御託宣であった。当時はこうした誤訳から、いろんな誤解が生じ物議をかもしたことが多かった。〝Off limits〟などの掲示もその一つで、それは日本人の「立入の禁止区域」ではなかったのであった。

誰か英国の推理作家の謎解きにも使われたことがあったと記憶しているが、〝I killed him.〟と〝I have killed him.〟との区別も、うっかりすると誤解を招き易い。ラフカディオ・ハーンの『怪談』の中に〝…you killed him (=my husband)! …me too you have killed …〟(あなたは私の夫を殺した。私まで殺したも同然だ」とおしどりのめすが歎く場面がある。

マイケル・ガースダンスキーは『言語の冒険』において、ポツダムの最後通牒に対して「黙殺」という日本政府の使った言葉が、同盟国側に〝ignore〟「故意に無視する」という意味に翻訳された。しかし「黙殺」には〝reserving an answer until a decision is reached〟「結論が出るまで返事保留」という意味があり、むしろこの方が普通だから、もしこの意味に解されたならば、アメリカの原爆は落ちなかったであろう代りに、戦争は不必要にまだ続いたかも知れない、というようなことを書いている。

かっては〝grave consequences〟「重大な結果」という言葉が、それぞれ英語と日本語のもつニュアンスのために、外交的物議を起したこともあった。

アフリカの言語学者でバイブル翻訳の権威であるユージン・ニーダは『茨と薊』というエッセイで「バイブルの翻訳は容易だと思う人が多いが、到るところで訳者は悩まされる。その土地の文化・風習・伝統・ものの考え方等を知らずに、不用意にテキストをその土地の言葉にあてはめる結果、とんでもない誤用・誤訳におちいることが多い」と言って興味深い実例を数多くあげている。その一つ二つを紹介してみよう。

〝salvation〟「救済」という言葉は、権力や罪からの「解放」という真の意味で〝freedom〟と同義であるが、西アフリカのある地方の唯物論的・現世的な土民にはこれが全く通用しない。彼等は聖職者と知り合い、その説教を聞くと、そのおかげで強制労働や税金から「解放」されると思いこんで、魂の「救済」には一向無関心であったという。

また西メキシコのインディアンは家屋を麦わらや草で造っているので、いったんききんに襲われると、家畜類は文字通り家をむさぼり食ってしまう。そういう彼等に〝devour widows' houses〟(Mark,12：40)「やもめたちの家を食い倒す」立法学者の話をすると、彼等が立法学者はどんよくな家畜のことと受取ってしまっても無理からぬ次第であったという。

しかしフランス領西アフリカのサハラ砂漠の近くに住むモッシ族は、船とか錨とかを見たこともなければ、もちろんそんな言葉ももたない。だから〝a sure and steadfast anchor for the soul〟(Hebrew, 6：19)「たましいを安全にし不動にする錨」の一句は理解しようがない。ところが幸い夜間牛馬をつないでおく〝peg〟「杭」があって、この代用語ならよく理解できることが分って、上の句を〝a strong and steadfast picketting-peg for the soul〟と置きかえて、却って成功したこともあるという等々。

さて筆者の知っている限りでは、書名も同じ『誤訳』という二冊の本がある。一つはちょっと古く竹内謙三氏(昭和三九)であり、他はW・A・グローターズ、柴田武氏の共著(昭和四二)である。どちらも非常に面白く有益である。例えばある訳者が英語の知識の不足のために犯した誤訳の一例として、後者の本に載っているのに次の如きものがある。〝One of my most exciting experiences took place in a Fifth Avenue stage.〟「私の最も感動的な経験の一つは五番街のある劇場の舞台で起った。」という訳は、正しくは「五番街の乗合馬車の中で」でなければならなかった。それはもう少し読み続けると、舞台で起り得べき経験でないことがすぐ分らなければならなかったはずだとある。又文法や語源の知識不足のために誤ったものとして、〝Of all his kings Richard is the only king unshielded by Shakespeare's reverence, the angel of the world〟というジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』中の一例がやりだまにあがっている。「この世の天使なるシェイクスピヤによって敬意をもって守られていない唯一の王がこのリチャードです。」という某氏の訳は二重の誤りを犯していると指摘されて、詳しい説明が示されているが、これを省略して結論だけをいうと「シェイクスピヤのいわゆるこの世の秩序を守るものなる敬意をもって……」と訂正しなければならないようである。

しかしこうした本を読んだあと味があまりよくないのは何故であろうか。中には些細な間違いでも何か鬼の首でも取ったかのように得とくとして指摘されていることに対する感情的反発でもあろうか。他人のあげ足とりなどは卑しいこと、大丈夫のすべきことではないという日本人特有の潔癖感が働らくためでもあろうか。現代は「翻訳公害」とか「翻訳亡国」とか極言されるほど、汗牛充棟もただならぬ翻訳書の洪水であるが、その わりには翻訳の批評とか、誤訳の指摘がまだまだ盛んではない。原書で読むから翻訳はいらない、訳本の存在なんか知らないという大家や、知ってもいるし利用もするが、知らぬふりをする学者も案外多いせいかも知れない。たしかに一般読者は些細な、いな重大な誤訳なんか問題にしないで有り難がっているのであろう。外国では翻訳者の名前が記載されない例が普通であることを思えば、我が国の麗れいしく訳者の氏名が発表されるのは冥利につきる話しではないか。

中野好夫氏は「誤訳は畳のほこりみたいなもので、たたけばいくらでも出てくる」とどこかに書いている。さる高名な英文学者は、ある大学の教授控室で「僕なんか一回の講義に平均三つ位の誤訳をやってるんじゃないか」とやけくそ的発言をしている。筆者などよくまあ今日までもっているものだと言はざるを得ない。学生諸君の珍答案や迷訳を読んで抱腹絶倒した経験も実に多いが、又中には案をたたいて三嘆これを久しくするほどの名訳に会う喜びも、たまではあるがないではない。

イタリヤの諺に〝tranduttore, trandittori〟(=The translator is a betrayer.)「翻訳者は裏切り者」というのがあるそうである。いくら頑張ってみても翻訳は所詮二番煎じである。原書の上に出ることは稀有のことであろう。〝Nothing improves by translation, except bishops.〟「翻訳してよくなるものは皆無だ、ビショプの栄転は別だが」という

うシャレがあるくらいだ。

正訳をしながら誤訳をしたと同じ結果になる場合がある。外国の学校のカリキュラムに「国語」という意味でそれぞれ「フランス語」とか「英語」とか挙げられている。これをうのみにして我が国のある学校で、そのカリキュラムに「国語（日本語）」ではなくて、「フランス語」とか「英語」とかいう外国語を丸うつしに組み入れたそうである。"life insurance"「生命保険」も「生活保険」と最初に訳していたら、えんぎをかつぐ日本人に勧誘員があれほどいやがられることはなかったであろうといった人もある。

エスペラントも一向に普及が進まない。せめて英語だけでも、ジョージ・オーウェルの「ニュー・スピーク」（『一九八三年』）なる新造語とか、「ベイシック・イングリッシュ」とかが実施されたら、翻訳も大いに助かることだろうが、その代り恐らく味気ないものになってしまうことであろう。現状では『創世記』のいわゆる「バベルの塔」の呪いが解ける日まで、一言一句誤訳せざらんことを心がけるほかあるまい。

そのためには感情を交えず、謙虚に人の言を聞かなくてはならぬ。先きに挙げた二冊の『誤訳』や、横井忠夫氏の『誤訳・悪訳の病理』などやはり歓迎すべきである。更には原語の持つ単なる意味だけでなく、原書の持つムード・リズム・立体・陰影といったものを誤りなく日本語に伝えることが大切である。しかも日本語に訳すからには、当然国語の知識が人一倍必要であって、これなくしては誤訳ではなくても適訳・名訳を得ることが至難である。この意味に於いて、中村保夫氏の『翻訳の技術』、更には河野一郎氏の『翻訳上達法』は真によき参考書であると思う。

（筆者は英文学科教授）

昭和五十年度 学科賞・総領事賞受賞者

神学科		
神学科賞	枢機卿賞	大井　明
	丸山　秀夫	
英文学科		
英文学科賞		
同		堀越美保子
		中山由起子
同		稲田三千代
アメリカ総領事賞		松本　麗子
同		池田　典夫
イスパニア文学科		後藤　章次
イスパニア文学科賞		浅野　光子
イスパニア大使賞		塩井加夜子
同		億川まり子
フランス文学科		小林　尚子
フランス文学科賞		藤田　恵子
フランス総領事賞		坂本せつ子
同		億川まり子
ベルギー総領事賞		小林　尚子
同		出口　孝
学生会功労賞		鈴木　均
同		高田　寿郎
同		池田　典夫
同		坂本　弘美

卒業生の進路報告

1　51年度（51・3卒業）就職状況

(1) 就職率表（%）

	英	西	仏	計
男	93	100	75	89
女	96	100	100	98
計	95	100	88	94

(2) 規模（資本金）別の表（%）

資本金	10億以上	～3億	～1億	～1千円	1千円末満
内定者（%）	22	15	16	38	9

(3) 主な就職先

日本オリベッティ。日本航空。シャープ。丸大食品。福井商事。大倉建設。日本シェーク。プルーフ。阪急百貨店。豊島自動車。山甚物産。三陽工業。近商ストアー。井上定。日本コレス。日石トーメン。第一勧業銀行。神戸市北農協。ミカレディ。伏見ツーリスト。セイドー文化センター。豊中市（保母）。城星学園。大阪大学。その他

2　51年度求人状況

(1) 求人会社の規模別の表（%）

資本金	10億以上	～3億	～1億	～1千万	1千万末満
男	8	15	28	42	7
女	19	10	25	37	9

(2) 就職希望者に対する求人倍率

	求人件数（社）	求人数（人）
男	7.9 倍	27.7 倍
女	1.8 倍	6.3 倍

3　50年度までの過去十二年間における卒業生の主な就職先

(1) 会社

三菱銀行。協和銀行。ファーストナショナル・シティ銀行。オランダ銀行。日本航空。全日空。パン・アメリカン航空。エール・フランス航空。スカンジナビア航空。ブラジル航空。日本オリベッティ。神戸製鋼所。小松製作所。湯浅金物。阪田商会。クボタ・ハウス。住友商事。ダスキン。阪急百貨店。高島屋。阪急交通社。大倉建設。鴻池組。大林組アルキャン・アジア・LTD・創元社。読売新聞社。朝日イブニング・ニュース社神戸新聞社。YMCA。ECC。その他。

(2) 教職関係

幼稚園19名。小学校（公・私立）15名。中学校（〃）15名。高校（〃）39名。短大・大学―講師10名。助手2名大学図書館等（職員）5名計105名（上記教職関係者数は英知短大卒業生を含み同窓会名簿を参考にした。）

人事

退職　三月三十一日付

英文学科講師　トマス・M・モリシー

研究室便り

○**岸英司学長**（神学・宗教学）は、四月一日関西学院大学において開かれた日本基督教学会近畿支部会において「進化論とキリスト―内村鑑三、賀川豊彦、テイヤール・ド・シャルダンの場合」と題する研究発表を行い、多大の感銘を与えた。

これは内村、賀川にわが国の二人の代表的思想家に対する再認識をうながした研究としてカトリック・プロテスタント両者から注目すべき反応を呼びおこした。

○**西山俊彦教授**（社会学）はカリフォルニア大学 Institute of Personality Assessment and Research 所長 H. G. Gough 教授の奨めで Journal of Cross-Cultural Psychology, Vol. 6, No. 4, Dec. 1975 誌に "Validation of the CPI Feminity Scale in Japan" なる論文を発表した。従来の研究データの小考察ではあるが、パーソナリティの比較文化論的意味合いから興味ある寄与ではないかと期待されている。

○**玉谷直実助教授**（心理学）は、「世紀」二月号に「真実に生きる職業」と題する論文を発表した。これはサイコセラピストとしての立場から、矛盾と真実を生きる実存的意義について論究したものである。

○**井上尊嗣助教授**（英米文学）は、二月二十八日付で、中央出版社から教皇パウロ六世著「マリアーリス・クルトゥス」を翻訳出版した。同書は現在園田聖パウロ書院にて発売中である。

○**宮功講師**（典礼学・外書講読演習）は、昨年十月三日に開かれた大阪楽友協会音楽研究所研究講座で「ミサの意味とその音楽」と題して、宗教と音楽の未知の部分を中心に、「ミサ聖祭」の原義や成立の様態などの通則を解説した。

○**本多正昭兼任講師**（道徳教育の研究・倫理学）は、上智大学人間学会刊行の「人間学紀要」第五巻（昭和五十年十二月二十日発行）に、「相即的身心論への道程」と題する論文を執筆した。

○**東谷穎人兼任講師**と**有本紀明兼任講師**（いずれもイスパニア文学）は三月二十五日付で、白水社よりホセ・カルシア・ロペス著「スペイン文学史」を翻訳出版した。

○**三原幸久兼任講師**（イスパニア文学）は、本学有志学生たちと共に、昨年九月十三日付で、イスパニア昔話研究グループより、クリエル・メルチャン編「イスパニア・エストレマドゥーラの昔話」を翻訳出版した。第一版は七〇〇部印刷済みであり、頒価は一冊一二〇〇円となっている。また三原講師は昨年十一月十五日付で、三弥井書店からコルテス・イ・バスケス編「スペインの昔話」（世界民間文芸叢書「第二巻」）を翻訳出版している。

英知通信
昭和五十一年三月三十一日発行
編集・発行者　英知大学　学長広報室
兵庫県尼崎市若王寺苗田一〇の一
☎(06)四九一―五〇八三
〒六六一